

産油国(カタール)と消費国(日本)の石油企業の若手社職員のための情報交流プログラム

1. 概要と背景

平成 25 年 5 月、産油国との関係強化のため、カタール国際マーケティング会社（Tasweeq: Qatar International Petroleum Marketing Company Ltd.）のアブドゥラ アル・アブドゥルマレク専務取締役（総務管掌）（Mr. Abdulla Al-Abdulmalek, Executive Director-Administration）、及びマジッド イブラヒム研修開発部課長（Dr. Majid Ibrahim, Head of Learning & Development）を日本へ招へいしました。その際の打合せにおいて、本プログラムについて討議し、双方で検討を開始することで合意をしました。

これに続きJCCPは平成 25 年 11 月に、Tasweeqとの間で、両社の協力関係をさらに推進していくことに合意し、覚書を締結した際、実施についても言及されました。カタール（Tasweeq）からの若手社職員の派遣時期については平成 26 年 12 月 2 日（火）～ 12 月 12 日（金）として準備を進めることとし、日本からの若手社職員の派遣については平成 27 年 1 月 25 日～ 1 月 29 日（カタール滞在期間）で推進することとしました。

2. 結果

2.1 カタール Tasweeq の若手社職員のためのプログラム

カタールの Tasweeq から、日本へ原油・コンデンセート等の輸出版売業務を担当している若手 6 名（男性 3 名、女性 3 名）と、引率役かつ代表者としてアドミ部門長が同行して計 7 名を招へいしました。原油の輸入、備蓄から消費者までのオイルロードの行程を追いながら、日本での石油のサプライチェーンと現在の状況を理解する内容とし、平成 26 年 12 月 2 日（火）から 12 月 12 日（金）の間で実施しました。

研修の内容は、JCCP での講義として「日本の石油産業の概要」、「日本の石油産業に見る日本のマネジメントについて」と、カタールに派遣する日本の若手社職員と合同で「グループ討議：職場の問題点と解決策及び自身の行動計画」について討議を行いました。

「日本の石油産業の概要」では、日本の石油産業のおかれている実情、製品の需要の変化と石油会社の実態等、日本の石油事情を理解する内容を説明しました。特に、需要の減退と高度化に伴う重質油の処理比率の小さな製油所の閉鎖、競争力強化のための企業の合併、新エネルギー分野等への展開などの日本の石油会社の置かれている現状を説明しました。「日本の石油産業に見る日本のマネジメントについて」では、企業の社会的責任の重要性和、職員の育成への取り組みとして TPM 活動について説明をしました。また、グループ討議では 3 班構成で各班ともに、大きなテーマを選択し活

発な討議を行い、まとめでは妥協をすることなく真剣に取り組みました。本討議を通じ、カタールと日本、世代、職務内容等の違いはあっても、抱えている問題点が共通であり、目指しているところが共通であることを強く認識でき、強い絆が形成できつつあるものと感じました。



グループ討議風景

また、実地研修として、日揮(株)本社では、カタールでのプロジェクトの取り組み、運転、保全等につながるリスク管理などを学び、JX 日鉱日石石油基地（喜入基地）にて、原油の搬入・出荷・備蓄機能を確認しました。特に、本基地が原油貯蔵と配送だけの役割ではなく、国家備蓄の役割を果たしていることを理解することができたようです。



タンクの保全現場にて（喜入基地）

コスモ石油(株)四日市製油所では原油の入荷から製品の生産にかかわる各プロセスの詳細につき解説を受け、石油製品の出荷計画と出荷システムについて具体的な事例を示しながら説明をうけました。

東亜石油(株)京浜製油所にて、本製油所の強みである重質油処理技術を生かした原油精製委託契約について説明するとともに、ガソリンの供給を主体とする製油所から、化学原料の供給製油所への転換を目指していることを説明しました。現場視察では、場内を徒歩で視察し設備管理状況を間近に確認することができ、フレキシコカーの反応器の塔頂（高さ50m）に上り製油所と近隣のコンビナートの全体を確認することができました。

出光興産(株)千葉製油所では石油精製と石油化学の連携によるプロジェクトについて説明を受け、石油精製で生産される留分を、石油化学原料として効果的に活用すべく各社が連携しているプロジェクトであることを説明しました。また、石油化学製品とその原料との関連を、実際の製品の展示室で直接触れることで理解を深めていました。

2.2 日本の各石油会社の若手社職員のためのプログラム

JX 日鉱日石エネルギー、出光興産、コスモ石油、昭和シェル石油から各2名とJCCP 職員1名を代表として計9名（女性1名を含む）を、平成27年1月25日から1月29日（カタール滞在期間）の間、カタールに派遣しました。本プログラムの目的は日本の若手社職員にカタールの石油・ガス産業を紹介し、各関連地域を視察し、そのサプライチェーンを理解できるものであり、カタールの文化と歴史に触れられるものになるよう、Tasweeqにて準備がなされました。



サアド アル・クヴァリ氏（Mr. Saad A. al-kuwari, Tasweeq, CEO）（写真、右から3人目）と

初日に Tasweeq 本社においてオリエンテーションが行われ、アル・アブドゥルマレク専務取締役（総務管掌）のオープニング・アドレスに続き、アブドラジズ アル・ミール取締役（Mr. Abdulaziz Al-Meer, Planning and Performance Director）から、Tasweeq の会社概要とその役割、日本との関連性について説明をされました。さらに JCCP から、日本のエネルギー状況について、日本の石油需給と現在需要が減退する中で、各石油会社が今後も安定したエネルギーを供給するために、事業を継続できる様々な取り組みを行っていることを紹介しました。

2日目からの実地研修では、まずカタールの原油・ガスの生産地区であるカタール石油（QP）Dukhan 地区を訪れ、80km×8km の広大な油田地区のオペレーションセンターで、本地区の説明を受けました。



カタールの産油・産ガス状況

これに続き、Jaleha station の原油の気液分離設備の視察を行い、本地区の目玉であるガス・コンデンセートの回収精製装置の視察をおこないました。QP が原油のみならず、リザボアにあるガスとコンデンセートを搾り取り収益を上げようとしている様を実感できたようです。広大な Dukhan 地区の移動の際、クリスマスツリーを数多く確認ができ、また、第一号井の記念公園で歴史を感じることができました。本一号井は1939年に生産を開始し、第二次世界大戦勃発とともに生産を終了したとのことでした。



第一号井クリスマスツリーにて

3日目には、QP グループの生産ガスの処理設備群のあるラス・ラファン（Ras Laffan）地区を視察しました。警備が非常に厳しく、広大なラス・ラファン地区の中をバスに乗りしたままではありましたが、Pearl GTL PLANT、RAS GAS、Qatar Gas の装置群、また、海水の取水口付近と配管の規模の日本とのレベルの違い、排水の処理設備、付随する発電所等の視察ができました。見学距離約30kmのすべての行程において、QP のコミュニケーション・広報部の担当が本地区の

沿革、装置内容などの説明をおこなっていただきました。続いて、現地の日本の石油会社の駐在員や QP 従業員でも入構が困難な天然ガスの積み出し港に入構することができました。数隻の LNG 船が接岸しており、積み込む状況を視察できたことは幸いでした。しかしながら、ラス・ラフアン製油所（Qatar GAS の装置：原料はコンデンセート）に立ち寄れなかったのは残念なことでした。

4 日目には QP の NGL 装置、製油所をはじめ鉄鋼会社、石油化学会社、潤滑油会社のコンビナートのあるメサイード地区を視察しました。

今回は、製油所工場等の視察は計画されておらず、出荷基地とその設備の視察のみでした。しかしながら、QP の、出荷基地のオペレーションマネージャーから、港湾設備について、丁寧な説明を受け、様々な質問に丁寧に応答いただけました。



QP MESAEED 本部にて

最終日には、Tasweeq の本社において、Tasweeq のマネジメントと 12 月に日本に派遣をされた Tasweeq の若手の出席のもと、日本の若手社職員の業務内容と今回の訪問によって得られたもの、感想と今後の活動にどのように活かしていくかについて報告を行いました。今回の経験は有益であり貴重な経験ができ、かつカタールの文化の一面に触れることができ、必ず今後の活動に活かしていくとの前向きな発表がなされました。発表のまとめとして、アル・アブドゥルマレク専務取締役から今回の成功と、来年度も継続して実施をしたいとお話をいただきました。



発表風景（コスモ 空閑氏）

3. 振り返り

カタールとの若手情報交流プログラムの実施を企画し、初めて実施することができました。これは Tasweeq と JCCP との MOU において本プログラムの実施を盛り込んでいたことによる成果と考えます。

日本での研修のプログラム内容は、日本が原油の輸入から消費者まで石油関連の製品を届けるまでの行程を直に体得するため、また、日本の石油会社が日本国民に石油エネルギーを安定、安全かつ安価に届けるという目的のため、各社がそれぞれの特徴を持って対応している様を理解してもらうために盛りだくさんなものとなり、消化不良となった面もあったが、参加者からは、コースの目的を十分に達しえたと考えられる、とのコメントが示されました。参加者は、本コースでの経験を活かしカタール、Tasweeq での活動をより良いものにしていきたいとの強い意志を示していました。また、Tasweeq の他の若手にも今回のような経験をさせたいとのことから、大半の参加者が、本コースを来年度も実施できるよう Tasweeq のマネジメントに要望をしたとの意見を出し、その際、電力会社（天然ガスの主要ユーザーとして）、石油化学会社（石油の付加価値化）、石油製品のデポ（物流の内容）、ガス関連の内容を加味してほしいとの要望が出されました。

一方、日本からの派遣プログラムは、Tasweeq が QP 等関係各社への事前の調整を行い、入構が困難な場所等のセキュリティチェックについて、VIP 対応に準拠したスムーズな対応がなされていました。

日本からの参加者は積極的に取り組み、多くを吸収する姿勢を示し、「本プログラムは有益であり、今後の活動に大いに活かしていく」とのコメントを寄せました。その反面、参加者が製油所からのエンジニアが主であったことから、石油精製、ガス精製等の設備の詳細視察ができずに終わったことは、自社の精製との比較など期待していた内容に即することができませんでした。この点については、当方が Tasweeq の計画に対して十分な申し入れをしていなかったことによる結果と考えます。

カタールでの本プログラムは、現地の新聞に掲載されました。なお、Tasweeq と 2015 年度も若手情報交流プログラムを実施することで検討することに合意をしました。参加者からの要望などを加味し、来年度の内容はより充実したものになるよう検討してまいります。

（研修部 刀襦 文廣）



GULF TIMES 09. Feb. 2015



Qatar Tribune 09. Feb. 2015

新聞切り抜き